城下町の構成と変遷　～広島を事例として～

広島工業大学　正会員　　今川朱美
広島工業大学大学院　学生会員　○小田雄司

１．はじめに

都市とは、規模や形態、歴史や文化によって形成されるものであり、それぞれの都市ごとにその特性や景観は異なるものであった。しかし、戦後の都市は、都市施設の構成（＝都市を形づくる道路や鉄道、建物など）によって形づくられ、中心市街地に高層ビル群がならぶ北米型と言われるタイプのものが多く、都市のアイデンティティが喪失している。

本論では、特に地方都市の大部分は旧城下町であることから、近世日本の都市形成の基盤となった「城を中心として構成された都市＝城下町」に着目し、都市構造の変化について分析を行い、都市のアイデンティティの起源をたどる。そして、下地となった都市構造と、現状の都市の姿を比較することにより「その都市らしいまちづくり」すなわち最適都市＝コンパクトシティへの糸口を探ろうというものである。

２．城下町の類型（近世の社会・都市構造）

城下町の構造は、成立時期別に５類型[1]に展開している。戦国期に城下町が誕生したときは、武家地、町人地、寺社などが混在し住み分けがなされていない原初的形態の「戦国期型」から、城を中心に求心的構造を伴い、明確な区分によって計画的に配され、城下町全体を惣構えで囲繞した「総郭型」へと展開を見せる。広島を含み、姫路、大和郡山、松江、津、鳥取などが、近世まで総郭への執着を見せている。これらは、敵軍にではなく、洪水の襲来に備えたためである。

都市が成長し、都市空間が肥大しはじめると、上級武士の屋敷群と主な町屋地区のみを内包した「内町外町型」、さらに城下町が拡大を見せると町屋はすべて放出し「町屋郭外型」となるケースが多い。さらに城主の権力が確固たるものでなくなったとき、都市もその構造をゆるやかに開放し「開放型」へと城下町のプランは変容を見せる。

さらに、明治以降の変容から現在へのつながり、つまり新しい都市空間構造への改変の過程を見定めることによって、城下町プランの特性が明らかになる。特に土地利用の変化については注目すべきであり、旧城地や武家屋敷跡には、官公庁、教育・文化施設などの集積、そして広島を顕著な例として師団司令部・連隊など軍施設の立地が見られ、それらが城下町空間の都市機能を更新することによって混在している。同じように旧城下町から発展したヨーロッパの地方都市が、19 世紀までの城下町空間の周囲を取り囲むように、20 世紀の都市空間が形成されていることと比較すると、日本の城下町空間には、新たな都市機能をも内蔵するキャパシティが備えられており、明治以降の土地利用も、城下町をベースとした類型が可能である。

３．縦町と横町

街路の構成によって城下町の分類を行うのであれば、縦町型と横町型に分類できる。城の大手門に向かう大手筋が、城下を貫く主要な街道筋や目抜き通りとなる場合が縦町型で、大手筋と主要な道筋が交差する場合は城を正面にして、横に伸びる街路を中心とした関係となるため、横町型と呼ばれている。縦町（竪町、立町）とは、町屋敷や武家屋敷の表口が連なる主要な通りに与えられた名称であり、大手門から城下町周辺部へと空間構造上の格差がある(図１[2])。

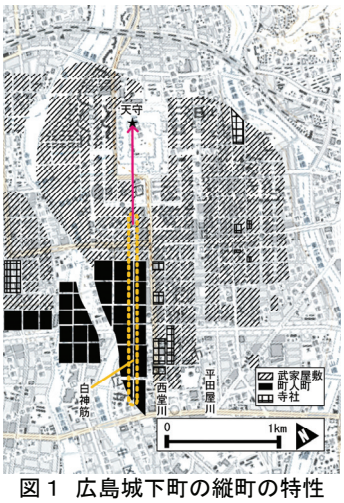

図１　広島城下町の縦町の特性

縦町は織豊期の城下町に多く見られるが、横町は関ヶ原の戦い以降、徳川期の城下町に見られる。城下を貫く街道筋が主要な通りと位置づいており、城を中心としつつも交通動脈を重視しており、町や街路に格差がなく平等であるのが見られる。

縦町型と横町型の混在する城下町も存在する。広島は、縦町型として建設されたが、街道を導き入れたために、後世になって横町型に転じた（図２[3]）。

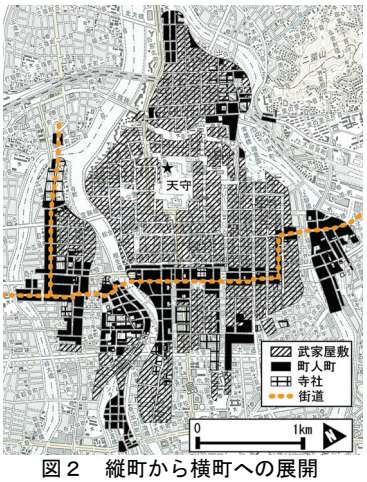

図２　縦町から横町への展開

城下町は城を中心

とした領土支配拠点（縦町）から市場経済ネットワークに対応した構構造（横町）に展開したといえる。

４．広島城下町の構造

先述したように、縦町は「領土支配拠点＝軍事」色が強く誇示される都市構造である。これは景観にも演出されている。城下町から天守閣を望むヴィスタも支配力を示すものであり、目抜き通りの正面に望める天守が視線を遮るように計画されていた。また、水運の便を開くため、南北に並行して平田屋川と西堂川が直接引き入れられた。運河沿いには尾道町・塩屋町・西魚町・東魚町等の商人町が位置した。この運河も広島城を臨むヴィスタが適応しており、広島城下は縦町の体をなしたのである。町人の住む区域は侍屋敷と区別され大手門正面を南に走る白神筋を中心に城郭の南方と西南方に設定された。

毛利氏に代わって入封した福島正則は家臣の数が毛利氏よりも少なかったこともあり、侍屋敷の区域を縮小し町人住居の区域を大幅に拡充することができたため､自由で開放的な性格を持つ町人町をつくりあげた。また西国街道を城下に引き込んだことにより、町人町はさらに賑いを見せることとなった。西国街道を中心に町人町が栄えたことにより、縦町構造であった広島城下は、縦町型と横町型が混在する城下町へと変ったのである。（図２）

５．現在の広島市

明治維新後、天守周辺の藩用地は国有地となり、軍の練兵場や帝国議会の敷地として使われた。日清戦争までは仮首都として日本の軍事中枢であった広島は、第二次世界大戦終戦時にはすべての施設が燃えてしまったため都市の再建が行われた。城下町の区画はそのままで、広島城とその周辺は軍事施設ではなく行政施設や公園として整備された。特に二の丸跡には裁判所や、県庁、県警、病院などの公共施設が配置されている。

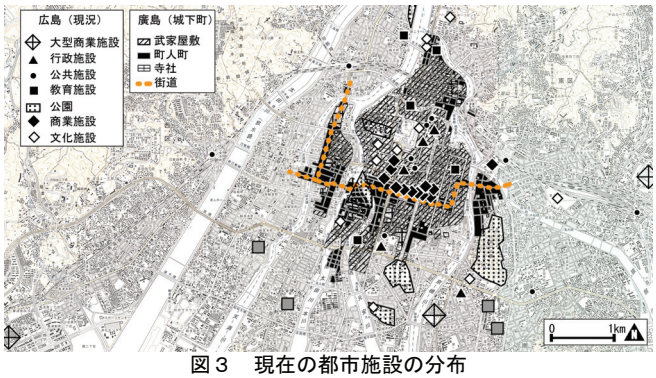

図３　現在の都市施設の分布

旧城下町空間には公共機関が多く建設され、かつての町人町が中心市街地となった。西国街道は本通りと呼ばれ、商業集積地となった（図３）。戦後の都市再建により、次第に人口が増加したため、住宅が不足し、旧城下町の北を取り巻くように住宅地開発がなされた。旧城下町の南部には工場用地が誘致された。また、住宅地が旧城下町の周辺部に開発されたことと、自動車化社会の到来により、地価も安く住宅も多い旧城下町外部に進出を招いた。

その結果、商業の中心拠点は広島駅前地区や紙屋町・八丁堀地区であったが、旧城下町周辺の府中町、西区、安佐南区に求心力のある商業拠点がめばえ、都市の拡大化を許し、非集積化の都市へと変容してしまったのである。

６．まとめ

城下町は、つくられた年代の時代背景により構造が違う。広島は、防衛に重点を置いて計画されたまちから、他都市との人と物の往来によって経済活動が活発になるように計画されたまちへと変容を見せる。広島城下町は城主の交代とともに構造が変化し、時代の流れに沿ってきたのである。特に街道の及ぼす影響は大きく、福島氏が街道を引き入れたことにより、目覚ましいまちの成長をみせる。この発展が今日の広島市中心部をかたちづくる基盤となったといえる。旧城下の中でも、特に城周辺の賑わいは現在まで継続されたということは、旧城下町の都市構造が適切であったということではないか。とすれば、この都市構造こそが広島のアイデンティティの起源であったといえる。

すなわち、現在必要な都市機能を、旧城下町の都市構造に重ね、また、人口・経済規模を城下町であった時代に近づければ、目指すべき最適都市＝集積型の都市（コンパクトシティ）の実現に近づくのではないかと考える。

註

１）矢守による（文献３, pp. 17-21）
２）文献５　p. 14 芸州広嶋城町割之図に加筆
３）文献６　付図　広島町新開絵図に加筆

参考文献

１）広島県「広島県史近世２通史Ⅳ」広島県, 1984
２）高橋康夫, 他３名「図集日本都市史」 東京大学出版会, 2001
３）矢守一彦「城下町のかたち」筑摩書房, 1988
４）広島市「新修広島市史 第一巻 総説編」広島市, 1961
５）財団法人広島文化財団 広島城「広島城と毛利氏の居城」広島市市民局文化スポーツ部文化財課, 2008
６）広島市「図説広島市史」広島市, 1989